

## 絵手紙に触れた言語表現の考察

### 一、手紙について

意思疎通のための手段として用いられてきた。手紙の呼称は比較的新しいもので、江戸に入ってみられる呼び名である。古くは「尺牘・消息・書状・書簡と呼ばれ、他には単に便りともいう。

「手」とは元来、筆跡・手跡を指す。手書きのことである。『漢書』（郊祀志）に「天子識其手……」とあって、その注に「手謂所書手跡」との記述例がある。

平安時代では「手書きの上手」（『源氏物語』梅枝）、「御手おめでたくか、せ給」（『栄花物語』殿上の花見）等の用例がある。名跡・小野道風「屏風土代」の末部には「道風手」とあり、手は書と同義で用いられていた。

「紙」は文字の成り立ちが示すように、繊維質のものを叩き薄くのばしたものである。東洋文化圏では凡そ西暦百年頃、後漢の蔡倫によって紙が作られたという。当時の遺例も出土しているが、紙の普及はさらに下って三国時代と推定され、漢代には依然として竹・木を薄く細く加工した細長い形状への墨書を主としていた。

例えば「尺牘」の呼称の由来は、長さ一尺の木札の意味、「片」は薄く小さなものの意。古くは漢文体の文面のもの了指していた。

一方、紙に書いた古い手紙類では三国期の書、李柏尺牘等が挙がる。当時の肉筆実態の典例として重視される。倭蘭出土、三三〇年代と推定、ま

岡村 浩・太田 将浩・増田 桃子

さしく書聖・王羲之時代と近い。文中「消息」の用語、文末に「李柏頓首頓首」と結語を記している。これが羲之書「喪乱帖」では頭語として「羲之頓首」と記す。「頓首」とは頭を地面に付けてひれ伏す、丁寧さ、謙讓の意を強く表す用語である。時代の推移につれ、手紙の書式は変遷を遂げるものの、往古の慣習の一部は日本に輸入され定着、今も手紙を綴る上で鍵を握る。

また「書簡」の「簡」とは竹製の細長い札のこと。「書」は先の「手」と同じ意味で、手書きのこと。

なお、竹木簡は左行に枚数を重ねて長文に対応し、書き終わると文面を隠し巻いて紐で結んだ。これを「巻」と数える。現今、書籍の数詞に「巻」字を当てるのは、この名残である。「冊」字も似かよって、竹木簡を並べて結んだ形状を正面から捉え文字化したもの。因みに便箋には行が曲がらないように罫線が施してあるが、これも本来、並んだ木簡の形状を平面紙に見立てた発想から誕生したとも考えられる。古代の書式が現在の手紙文化に息づいている。

### 二、日中の書例

次いで日中の著名な書人の中から何人かの手紙に関する記述を行う。

## (1) 王羲之

王羲之(三〇三―三六二)は、東晋の書家で字は逸少。現在の山東省臨沂市にあたる琅邪郡臨沂県の人。書道史上最高の書家と言われ、書聖と称される。その書は名品とされながらも、今日に伝わるものは全て模本であり、真筆はない。

王羲之の書と伝わるものの多くは尺牘、すなわち手紙の類である。この尺牘の多くは知人や親戚に宛てたものであり、代表例として挙げるのが《喪乱帖》である。《喪乱帖》は《喪乱帖》、《二謝帖》そして《得示帖》の三つの総称であり、文頭には「羲之頓首」と手紙に用いられる用語が看取される。内容は祖先の墓を荒らされてしまった悲しみが書かれる。

## (2) 吳昌碩

吳昌碩(一八四四―一九二七)は、明末から中華民国にかけて活躍した書家であり画家、篆刻家である。詩、書、画、篆刻に秀でており、中国最後の文人と称される。

その尺牘の多くは、中国で手紙を書く際に多く用いられる信箋に書かれたもので、書体は草行書にて書かれる。先述の王羲之の尺牘に比べ、文字群の粗密感を強く感じることが出来る。また書かれた年代が六十歳前後のものが多いのである。

(太田 将浩)

## (3) 日本の名筆

日本の名筆として有名なものは、空海(七七四―八三五)が書いた《風信帖》や、藤原佐理(九四四―一〇九八)が書いた《離洛帖》などが挙げられる。二人は平安時代を代表する能書家である。

《風信帖》は、空海が最澄に宛てて書いた手紙三通を一卷にまとめたものである。書き出しに「風信雲書…」とあることからこの名称がつけられ

た。内容は、空海と最澄がともに唐から帰国した後にも、真言宗・天台宗の開祖として親交を結んでいた証となる、貴重な資料である。行書と草書を用い、ゆったりと書かれた《風信帖》からは、王羲之や顔真卿の書風が窺え、中国書道史において著名な人物達の書に触れ、書法を吸収してきたことが看取される。

《離洛帖》は、大宰大式に任ぜられた藤原左理が九州へ赴任する途中、藤原道隆へ向けて書いた挨拶の手紙である。この名称も、冒頭の「離洛之後…」にちなんだものである。書体は草書で自由自在に筆を操り、鋭く雄渾な筆勢が魅力である。藤原佐理の活躍した平安時代中期は、遣唐使の廃止により日本独自の文化が開花した国風文化にあたる。平安時代初期の唐の書法を基盤とした空海等の書から、より日本的な個性が強まった和様の書が確立したことが《離洛帖》等から散見できる。

それぞれ国や時代を代表する名筆を見ると、文章の内容や書風から人々の関係や文化の交流、変容が辿れる。

(増田 桃子)

## (4) 良寛の手紙

良寛の書跡中、手紙は重要な位置を占める。まず交友者の範囲を宛名から把握出来る。今日内容の伝わるものは凡そ三百通前後。女・子ども宛は皆無に等しい。庄屋・商家・医家・親戚・趣味家宛のものばかりである。

元々手紙は読後破棄されて仕方ない。受け取る側の意識によって、保存されるか運命が決まる。

次に書きぶりだが、比較的短文で、小紙面であることを忘れさせる悠々とした配字にまとめる。条幅作同様、くずし字の進んだ個性的な書だが、宛名の人々は読み慣れていたのである。五合庵時代に草書は懐素の自叙帖、仮名は秋萩帖、楷書は瘞鶴銘を手習いの対象にしたと記す古い文献が残る。その通り仮名は、手本とした拓本冊子に刻まれる秋萩帖の精習の跡が色濃く、島崎に住む最晩年の手紙にいたるまで、その傾向は変わらぬ。そしてこの仮名書きの風趣は、和歌を認める際の表現と同じである。

普段着も文芸の嗜みも区別がない。

手紙の内容は、諸々を頂戴したことへの礼状、中に無心した姿も頻繁に窺える。修行の面では、貴重な文献書籍借覧に関するものも含まれ、何を手にしたのか古典の範囲が判明する貴重な記述が読める。自詠の詩歌と共に、手紙文が伝わったお陰で、良寛の実像の一端が追究可能になるといつてよい。

手紙の鑑賞及び分析に関しては、

○『良寛の書簡』（BSN新潟放送刊）

○『定本 良寛全集』（第三巻 中央公論新社刊）  
が参考書として挙げられる。

### (5) 會津八一の手紙

早稲田大学卒業直後から最晩年、新潟市南浜通り時代のもので、封書葉書を問わずたくさん発信した痕跡が、幾種もの参考文献によって窺える。英文学者として出発し、専門を東洋美術史に選んだ彼だが、論文数は少ない。それに代替すると思われる長短の手紙が豊富に伝わり、八一にとって学問が机上の学者間、論文発表の形式よりも、直接一般に主張を伝えることの方が意義のある研究成果の示し方と捉えていたように思われる。従って受取人・宛名に各界の一流人が多く、短期間で手紙の往來を交わし、言論に努めている特徴が指摘できる。

一方いうまでもなく、今日文人の書の代表として高く評価される筆跡だが、感情の起伏に起因する文、書一致の表記は読み物として、かつ芸術品として鑑賞の対象とされ、中でも条幅にみられない万年筆・ペン字の自由闊達な書きぶりは見逃せない。

『會津八一の絵手紙』（小池邦雄編・二玄社刊）を取り上げてみる。時代については、早いものでは明治四十一年六月五日付・桜井隆政宛を取録。本文は朱塗の菩薩像を中央に描き、余白に経文を禿筆で墨書する。「八朔恭敬謹奉写」の署名下には「北人」（朱文印）を押し。この面のみをみて充分、八一の自画讀作に仕上がっている。

宛名面は郵便法上、半分を用件の記述に当てられる。速書のペン字によって中央よりやや下部に横線を引き、「国坊がいふことをきかぬときにこれを御見せ被下度候。アルバムの第一頁へ御入れおき被下候はば、当世向きの人はさぞビックリ可致候」と綴る。これで終わりと思わず縦書きから横書きに書式を変え、僅かな行末余白に「問題 この絵は何画にして何流に属するや」と、当時画壇が日本画と西洋画とで反目、かつ各々の分野における派閥争いが顕著だった折、八一は他者に迎合しない自己流を目指すことを滲ませる。

変わったところで差出人署名は、マルに「朔」字を付し、先の押印を書き印に見立てている。「朔」字は一日の意、八一は八月一日生まれであった。

同じく桜井氏宛（明治四十一年七月二十五日付葉書）では、本文に墨書でダイヤ状の枠を軽快に引き、中に人物の顔を描く。右上には、ただ一言「わかったぞ」。この一言によって人相に窺う微笑がしたり顔、得意になる一瞬の表情を活写しているのに気付く。

同氏宛（大正十五年四月九日付葉書）には宛名を流麗、墨痕淋漓に認め、本文には、その大らかな運筆と同趣の筆緻で、水藻の中を泳ぐ二匹の金魚を墨書。上方には「如魚在水」署名を右脇に「秋艸朔」、自署下部に朱文印一顆を押し。早手業になるが粗雑に映らず、奔放な表現と評したい。今日よりひと回りも小さな葉書の紙面が、逆に大きくみて取れる。この頃、早稲田中学校を辞任したり早稲田大学文学部の講師に就任したり、身辺多忙な折、自身の処世術について抱負をかように水魚に表出したのであろう。

別人・今井安太郎宛（昭和十三年一月二十一日付葉書）には、紙面を横にして、たづなを操作して疾走する馬上人物を墨書、上方に「鞍上有清風」、左下に「秋艸堂」（白文印）を押し、一点の朱色を添えることで水墨画に彩り、潤いを加味し、画面全体を引き締めている。「あぶみの上には清らかな風が吹いている」の意を示す賛文と、まさに一致した人馬図。五文字の各表情結体は、八一の条幅作にみる字形と同じで、構えて個展に出品する制作品も実用の書も表裏なく、自分の表現を樹立してゆく様が看

取される。良寛と同様の姿である。

小杉放庵宛（昭和二十六年三月十七日付葉書）は表裏毛筆。本文左に大きな白菊を毛の穂先で花弁、腹の部分で葉を筆圧を加えて描出。右に「小生は二十六日上越急行にて上京。二十七日午前から壺中居へまゐるべく候」と五行で用件を認める。今ならば皆がメールで済ませる文面に、凝った画を添えているのである。あたかも、この菊画を描くことを自娛として、序に文面があるかのようにも見受けられ、冒頭論文代わりの手紙と指摘したのと同様、八一の絵手紙は画作代わりの手紙と換言出来そうである。左下には画面を締めくくる「秋艸道人」（白文印）を一顆押す。

論文代わりの記録といったが、その一例が宮川寅男宛（昭和三十年十一月十六日付葉書）で、両面ペン字による。瓦の形状二体を描き、各々の名称に朱で×印を付け否定しているのは、おそらく宮川氏の著述中このような図解名称表示があったものを、師として八一が正したものとと思われる。

「これらの名称は、全部あやまり居れり。かかる通俗書の誤謬を訂正せんがために『古瓦名称考』を公表しおきたるに、予の学徒と公称する人にして、まるでこれを読み居らざるは驚くべき大失態なり。…学問と骨董店の常識と異なる所以ここにあり。」と手厳しい一語でまとめるが、文は人なり、八一の学究家たる姿勢がこのような実用書の一枚に拾遺される。

なお引用した宛先人についてだが、桜井政隆（一八七九～一九三三）は新潟中学校時代からの八一の知己で、八一の妹と結婚したドイツ文学者。今井安太郎（一八八七～一九六五）は早稲田大学での八一の後輩、教育者。小杉放庵（一八八一～一九六四）は画家で、随筆著述も多い。宮川寅雄（一九〇八～一九八四）は早稲田大学までの八一の教え子で、美術史家。

世に何通発信されたか想像のつかない、膨大な量から厳選された本書収録絵手紙は、各々八一の日常のひとコマの切り取りを示してくれる。改めて手紙が平常の実用品であること、時々思想、信条、教育の有様を浮彫りにしていることに深い感慨を抱く。

#### ①詩（言葉）書画一致

②東洋美術の粹・印芸術へのこだわり

③東洋美術史家としての専門性  
以上の点が、八一絵手紙に鑑賞出来る。

#### (6) 今川魚心子

本名文暁、幼名は喜代之。明治三十八年（一九〇五）一月十六日、市川文二、イトの三男として加茂に生まれる。大正六年、十二歳で新潟市宗現寺乙川文獅老師の下、得度。次いで二松学舎普通科に学び、後再び宗現寺で修行。昭和十一年、父方祖母の実家を継ぎ今川姓となる。昭和二十年、四十歳で宝来寺住職となり、以降この地で志功、磯野靈山等来遊の文人と交わりを結びつつ、文墨に親しむ。昭和五十九年九月十九日、新潟市にて逝去、享年八十。

生前、和尚の徳望を慕い、周囲が幾度か書画展を企画した。『魚心子和尚からの絵はがき』（昭和六十一・小林智明編・考古堂刊）は表題の通り、絵入りはがき二五八点を収める。これは、断簡零墨たりといえども魚心子の書が、与えられた者にとって大切にされた証左である。墨色が精彩を放ち、即興で絵に入れられた古今の漢詩和歌や、それらを機知に富む発想で言い換えたもの、また積雪丈余に及ぶ、会津との国境沿いにある奥阿賀の厳しい自然環境の中から絞り出された、人間味溢れる文辞が興味をそそる。実用品で芸術でもあり、和尚の分身といえる。

書簡集はそもそも、昭和五十六年十月八日から十三日まで大和百貨店五階文化サロンにおける「魚心子和尚のはがき展」出品作より選出した葉書を収め、出版したものである。同六十一年十二月九日より二十四日まで新潟市美術館にて行われた「三回忌記念魚心子和尚遺墨展」にあわせて刊行された経緯をもつ。

本の巻頭にある「魚心子和尚からの絵はがき 序」（小林智明氏記）には、人となりや人々との交流の有様が端的に綴られ、参考に資すべき文である。大方を引用させて頂く。

檀家の数が絶対的に少ない、越後と会津に界する辺境の、経営的には成

り立ちそうもない山寺で、妻子を抱えた一人の人間としての僧が如何に真摯に厳しい自然に溶け込み、如何に懸命に人の世の生に共感し、また情愛や友情といったものを育てたか、それらをこの絵はがきによって知らされるものであります。

それ故にこそ一片のはがきながら、常に頂いた人々が宝物のように長い年月保存され、このような書簡集が作られる結果になったものと思っております。そして今後更に多くの有縁を生む結果につながるものと思っております。

もう一つ申し添えたいのは、人並みはずれたレターライターでありました魚心和尚の書簡集としては、これはほんの一部であるということであり、数多くの絵入はがきの中から、この二百五十八葉を収載させて頂きました。この他に、これの何倍、何十倍ものはがきや封書の素晴らしき書簡が、この世のあちらこちらに散在して、人々の心に限りない安らぎや、おかしさや、優しさを与えてくれていることあります。

編纂の間にもふっと思い出したことは、「毎日郵便受を明けに行く時は、何ともいえない期待と楽しみがありました。」と語られた、或りし日の魚心和尚の笑顔でありました。

続いて本稿に未発表分を含む魚心子の葉書の文面を紹介する。小林氏の記述通り、優しい人物とユーモア、人々に安らぎを与える文言が短文で綴られている。良寛の詩歌を引用したり、仏典の一節を抜き出した言が多い。

難解難読に一般の方は思うであろうそれを魚心子はご丁寧に読み方や意味を付記して発信しており、他者にはない気遣いが手紙全体ににじみ出ている。

受け取り手は同じ東蒲原郡内の人物、寶来寺門徒、総代を務めた武藤惣一宛で、もうお一人は「新潟拓本研究会」を中心とする、文化活動で交流の深かった玉木豚春宛のものである。

葉書 表面ペン・裏面墨書 昭和三十九年九月十一日 玉木氏宛

【表面】

御便り拝受、秋風にびくびくしています。本御配慮有がとうござい

ました。一部御迷惑さまでも大上へ御送り願いたく、記念としてと書添えて下さい。岐阜、先月廿八日、三、六五〇円払込、今日か今日かとまって居ります。十一、二日弥彦、十二日夕実川上り（敬老会）十三日、豊み敬老会と佛事、十四、五も敬老会、十七、八、湯沢温泉、廿日廿一日実川彼岸等、記念品持参で一度拝参、今日庵、大口氏と御一緒にめしでもたべたいと思っております。奥川帰途御泊御まちいたします。

座禅用ふとん、水原から送る筈、御受納下さい（記念品）

【裏面】  
白雲西又東（水墨蛙図）

葉書 表面ペン・裏面墨書 昭和四十年十月六日 玉木氏宛

【表面】

春には春の山の幸、秋には秋の山の幸、都はなれし山寺にこの幸ありて有りがたき。弥平四郎へ舞茸狩り、十日実川行き由、負けました〜。

十一月三日から、文化祭、実川を重点的に、と喜んでいきます。写真クラブの方々の作品を展示させて頂けたらと思えますが、会長さんに話してみて下さい。七日出港九日会津、乱筆にて

【裏面】

山僧即貧僧老僧即盲僧 魚心子（水墨和尚図）

葉書 墨書 昭和四十二年二月十三日 武藤氏宛

【表面】

魚心子酔いて泥魚となる 御礼迄

【裏面】

一碗破孤悶二碗搜枯腸 魚心子（水墨茶碗図）

葉書 墨書 昭和四十四年一月十五日 武藤氏宛

【表面】

十二日御芳翰拝誦御原志拝受いたしました。寒中冷汗三斗の思いです。近

日中に貴意に添えたく存じます。

【裏面】

燈火数添油未厭冬夜長 魚心子〈水墨袖子図〉

葉書 表面ペン・裏面墨書 昭和四十五年二月九日 玉木氏宛

【表面】

八日午後帰山、御便り拝調、鬼カク、全快玲重、医者いらず門外不出で風なおり、禪の友は小生すでに払込み、贈呈のもの、何れ萬々。その分どこかへ廻します。杉山は上山の後家さん五十七才、若松病院にて。黒井氏来、おかまいできませんでした。石六への連絡有がとうございました。春を待つ御名吟、御観案の鋭さますますと感に入っております。十五日、小林、大塚氏も御同道おまちします。黒井氏、洋本忘れ「黒いこうもりどこさゆく、わたしゃかめだのイシャどんへ」

【裏面】

いかなる前世の縁ありや たがいにつたりすられたり 魚心子〈水墨挿鉢図〉

葉書 墨書 昭和四十五年二月十三日 玉木氏宛

【表面】

大法輪有りがたく御供養御礼申し上げます。十五日五十嵐様御出での由、よろしく、受験合格念じて居ります。今日玉木満江氏妻女、七十二の式でした。門外不出の句おもしろく拝見しました。御礼迄

【裏面】

やあいたわく俺の仲間はみな地獄 魚心子〈水墨和尚図〉

葉書 ペン書 昭和五十年七月二十五日 玉木氏宛

【表面】

露堂々と生きることは自己をいつわることなく千鍊鍛治せねば中々この境地に至れないかも知れない。然し春来れば百花らんまん、秋来れば千山紅葉、明歴々たるものは、私たちの教えにひらかれている。余計なこと

をかきました。

【裏面】

明歴々露堂々

明らかにはつきりあらわれていて、少しもかくすところがない。一般に真理は高尚深遠なところにあると教えられているが実はそれは「明歴々露堂々たるものだ」それ分らないのは、こちらの目がくもっているからである。よくみればなづさ花さく垣根かな。裏を見せ表を見せて散る紅葉。〈水墨壺図〉

葉書 墨書 昭和五十一年三月十六日 武藤氏宛

【表面】

春めてまいりました。このたび涅槃会、塔婆共養たしかに頂きました（一五〇〇円）御厚配あつく御礼申し上げます。明、彼岸入り、塔婆供養をつとめてだんごと一緒にお送り申し上げたく□□□□よろしく御願ひ申し上げます。御礼迄

【裏面】

明月梅花共一窓 魚 印刷紅梅絵図

葉書 表面ペン・裏面墨書 昭和四十八年一月二十四日 武藤氏宛

【表面】

珍しい春日和がつづきます。よすぎても、わるすぎても不安がつきまといます。尊翰拝承。三日、初午に拝受致します。御大切に遊ばして下さい。小生やや好調です。御返信まで。百万べん御届けします。

【裏面】

立春大吉 魚心子〈水墨だるま図〉

葉書 墨書 八月二十五日（年不詳） 武藤氏宛

【表面】

芳翰並び御志納拝受恐縮に存じます。残暑の砌、御清安を念じます。持病やや治まりつつあります。

## 【裏面】

閑雲独去孤月円 魚心子（水墨满月図）

（岡村・太田・増田）

## 三、言語と共にある書と絵画

先人の所業と現在とを比べてみる。今日「絵手紙」を愛好する人口は少なくない。手軽、手頃な空間に鑑賞対象として展示する例を多くみる。文字だけの手紙の展示はまずないので、絵が付いたおかげで取り扱いが変わって、親しみが持てる対象になった。それらを各所で、たくさん通覧していると、「絵手紙」の概念が規定済みで、作るために葉書を用いているようにも捉えられ、良寛や八一のような個人の趣味性は失われている。詩書画に一定水準の力量や見識を有する人物が、当意即妙に発信した味わいとは大きな隔たりがあつて、皮肉にも書展に足を運んで皆同じものに映ってしまうのと同様の問題点がある。一見表現が一律なので、あとは文面、文体の違いがあるかなのだが、余白を窮屈に埋めた文も書も、やはり画一的なものが目立ち、つまり、習い事に陥りかけている。

もう一度、先人の書業を振り返る。良寛の手紙にも、絵の入ったものがある。図解をしたもので、最初から絵手紙を書くつもりでの揮毫ではなく、相手が理解しやすいように添えた例である。

八一は早い頃、俳諧の研究を志したことがあり、先人の俳画に親しんでいたし、諸方面にわたる読書で培った「書巻の気」が、如何なる業績の土台にも効力を発揮している。また『會津八一の洋画』（中央公論美術出版刊）が出版されているように、壮年期周囲の画家に手ほどきを受けて本格派の油絵を制作している程、文芸への好奇心を広く有していたのだ。したがって八一の手紙に窺う画作は、よい意味で余技でありつつ、それ自体制作意欲の高まりで描かれた絵画作であり、一見粗画に映るかもしれないが、省画をこころえた人の業であり、その殆どに押印まで施し一枚を差し出すのに、芸術家として隙がない姿勢をみせる。そして時には文の脇役となり、画讀同様文意の補完者の役割を担っている。

良寛、八一に続き三人目に紹介した今川魚心子。先の二人程、知名度は高くないが、詩書画一致の面と、山深き寒村に居住する環境に身を置くことで磨かれた人格が相まって、非凡な文芸を残した。魚心子の場合、昭和四、五年に来越した画人・磯野靈山から直接水墨画を学び、淡墨、発墨の美しい絵手紙を大量に発信した。その受取人が魚心子を敬愛し、和尙の分身の如く小さな絵葉書を大切に保管した。範囲は東蒲原郡に限らない。

## 四、教育活動と重ねて

今日、芸術発表の舞台および学校教育の場面でも、書くことと描くこと、また文を作ることが全く別作業になって久しい。例えば、「図画工作」（三、四年下 日本文教出版）教科書を開くと、「絵と言葉で表そう」とある單元を見出した。続いて、「自分が考えたことや思ったことは、いろいろな方法で表わすことができますね。絵と言葉をひびき合わせて、自分が感じたことや、つくった物語など、つたえたいことを表わしてみましょう。」と記す。絵と言葉の組み合わせだが、言葉为主体的に生み出し、書く。絵と書との組み合わせでもある。筆者は毎年新潟市関屋地区公民館で小学生を対象に「文字と書道に親しもう」講座を出前講義として開講しているが、プログラムに宛名書きも含め葉書に便りを書く練習、そこにフェルトペンで彩色画を付記する学びのひとコマを設けているが、絵を付けてもよいと子ども達に伝えると、一層目を輝かせて手が動き始める。

試みに新潟大学教育学部中学校国語科書写受講生を対象に、手紙に関わるアンケートを取ってみた。項目とその内容を簡単に分析してみる。

- ①一年に何回葉書を出しますか。  
0回・・・4人 1～10回・・・26人 11回以上・・・1人
- ②一年に何回封書を出しますか。  
0回・・・4人 1～10回・・・26人 11回以上・・・1人
- ③もらった手紙で一番心に残るものは誰からのどんな内容ですか。  
家族や先生からのお祝いや励ましの手紙。友人からの誕生日のお祝い。画家や好きなアーティストからの手紙。先生や先輩後輩からの応援メッセージ

ジ。

④自分が出した手紙で一番心に残るものはどんなものですか。家族や先生への感謝の手紙。友人への誕生日のお祝い。画家や好きなアーティストへの手紙。年賀状。

⑤絵手紙について自由な感想を。

絵が添えられることによって、見た目も華やかになり季節感が感じられる。文章では伝わらない表現がで出来、より感情が伝わりやすい。年齢や書の経験に関係なく楽しめる、日常の中の書である。簡単なように見えて難しく、心遣いが垣間見られる。

アンケート結果を、総合的にまとめてみる。予想通り発信数は乏しい、しかしその数の割合に記述式の文章にみられた心に残る手紙の文面は、印象的にかつなるほどとうなずけるものが多かった。背景に、文面を読む行為と共に、相手の手書きに触れることで発信者を身近に思う念が強くなっているのではないかと思われる。

今日、他の媒体手段の利便性について押されて手紙を発信することの習慣化は難しい。しかし、前述のように手紙ならではの発信の効果があることは確かである。手紙を書きまとめる行為を少しでも身近に構えないものとして実践する一つの手掛かりが、絵手紙にあるのではないだろうか。

以上、大学生に聞いても、手紙を出す行為自体は大切であるとの認識をしつつ、一方その実践はくらしに殆どみられない。メール等代わりがあるばかりではなく、そもそも書き方を教えてもらう時間が教育機関でないことも、また書かない要因になっている。

中学校国語科書写の教科書には、はがきと便箋封書共に正しい書式が示されている。しかし半紙に毛筆の練習をするのが精一杯で、この毛筆の日常への活用のため、本来学ぶべき手紙の書き方が完全に埋没してしまっているのは大きな問題である。

文中、先人の手紙を鑑賞してきた通り、手紙における佳書は、もちろん書きぶり自体が達筆であればよいが、それよりも第一に「達意の文」、即ちつむぎ出された言葉遣いの方を重視したい。簡潔な良寛の手紙文は、読んであと味がよい。感情がストレートに表出した八一の手紙は、彼の哲学

がそこにあり、また読み物として大いに人を堪能させる。

さらに両者の手紙の行方、相手の存在が見逃せない。手紙文化は、交わり合うものである。教養・人格・経験の面でつり合いがとれる人々が、二大文人の周辺には大勢いたのだった。発信しない者の手元には当然来信はない。まず学生には身近な人、家族に出すことから始めようと薦めている。

書は意味を持ちコミュニケーション力の点で優れ、絵は言葉を持たない。書は記号を書く約束があり、形が決まっている。絵は自由に筆を走らせ、白黒の世界と違い、彩りがある。一方書には濃淡・余白の世界があつて、古来墨に七彩ありといわれる。

このように書と絵画には、多岐にわたる相関性がある。双方への興味を有する人物の育成は簡単ではない。実技系の学びの一環として書と絵画があつて、自ずと技術優先の学習になりがちであるが、何れも生活に用いることを目的としなければ一時的な習い事に過ぎず、学習の意味は薄れる気がする。そこで双方を日常に再生する一つの手懸りとして、先の教科書の「ふりかえり」の項目に「絵と言葉がひびき合っているかな」とあるように、「言葉」が接着の鍵を握ると捉える。「書」を「言葉」に置きかえる発想が、手紙文化においては可能になる。自分が考えたことや思ったことを、様々な方法で表す。その方法の一つが、書き、描く表現である。

そのように考えてみると、絵と言葉をつなぎ合わせる一例に当たるのが、絵手紙である。紙面に言葉・書・絵画を融合させることは、むしろ芸術でもあり、実用品にもなる。構えない会話記録の一つとしてもよい。文を読み字の個性と絵を見せ合い、お互いの気持ちや性格の一端を理解する。この視点で国語科・美術科教育の一コマに絵手紙の教材化があつてよいと考える。

本稿は新潟大学大学院教育学研究科の授業の一環として取り組んだ研究テーマを、受講生とまとめたものである。受講生の担当箇所には丸括弧で記名を付した。それがないものは岡村の記述による。

終わりに、手紙文化の教育効用について受講生が簡潔にまとめた一文を提示して、本文を締めくくる。

連絡を取り合う手段として電子メールやSNSが主流となっている現代では、生活の中で絵手紙を見る機会は非常に少なくなっている。文字を手書きする機会は少なく、社会の中ではほとんど用いられない。そのため、文字を書く事からあまり離れていない学校教育の中で、手書きの文字や絵の魅力を紹介し鑑賞させるべきである。

はじめに、学校では文字をきれいに書くよう指導されるが、絵手紙においてはみんな様ではなく、一人一人個性があることを伝えたい。機械で表示される文字やイラストと、人の手によって書かれた文字や挿絵にはどの様な違いがあるのか、実際に印刷されたもの、書かれたものを手にとって鑑賞させることで、子どもは手書きのおもしろさや温かみを感じ取るこゝとが出来ると考える。また、手書きで物事を相手に伝えるということ自身を表現することへ繋がることも伝えたい。

(太田)

今日、相手に文章として相手に伝える手段は、ソーシャルメディアが交流の主体となっている。これは手紙に比べて短時間で情報を伝えることができることや、文字のスタイルや間隔が統一されているため、読みやすいことが利点として挙げられる。しかし、このような利点がある一方で、筆者の個性を味わい、鑑賞する要素は薄れてしまった他、自動変換の機能の発展により、利便性が向上した反面、文字を読むことは出来ても、正しく書く力は弱くなっているといわれている。

手紙を書く際には、体裁や書く文房具等といった様々な選択肢があり、字形や用いる語句など様々な面から、書き手の個性が反映される。つまり手書きの手紙は、個性の表現や鑑賞を行う身近な手段といってもよい。さらに先に触れた文字の読み書き能力についても、向上させる一つの手立てと考えられることから、言語教育の一助となるのではないだろうか。

以上から、手紙は学校で学習する教科を生活に生かす手段であるとともに、多様な表現や文化に触れる素材でもあるといえる。

◇

◇

(増田)

平成二十九年六月十三日、新潟市立五十嵐小学校四年生二十九人を対象に、絵葉書作りの授業を行った。

二時間かけて水彩画による植物の描写のち、二時間を用いて絵に合致することばを添え、もう一面宛名書きを付して完成させる、全四時間構成のものである。絵と文字の書き方に加えて、文も個性を充分発揮することを伝えることに努めた。授業で取り組んだものが、くらしの中で実際に使用出来るのが、本時の学びの特色である。予め連絡帳に書いてもらった家族や親戚、友達達の住所・氏名を書くのは手こずったものの、日頃経験しない、相手が存在する学びに生徒は生き生きとした表情を見せた。いつもは国語と図画工作とで、別々に学ぶものの融合実践である。学習を支える教師の側に手紙を発信する喜びや関心がなければ、このような機会を作ることは難しい。

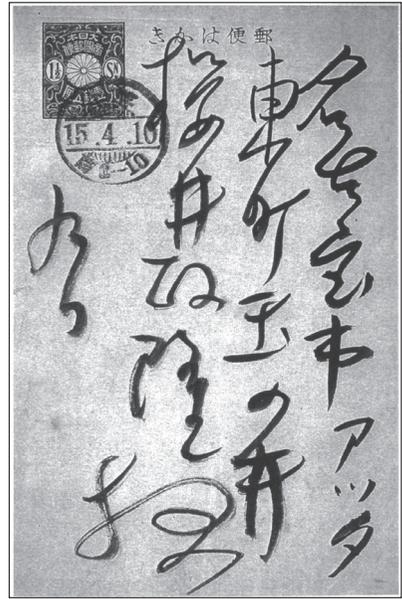
今回は四人の学生にアシスタントとして参加してもらい、個別指導の補助に当たらせた。



図一 小学校四年生絵手紙(絵葉書)



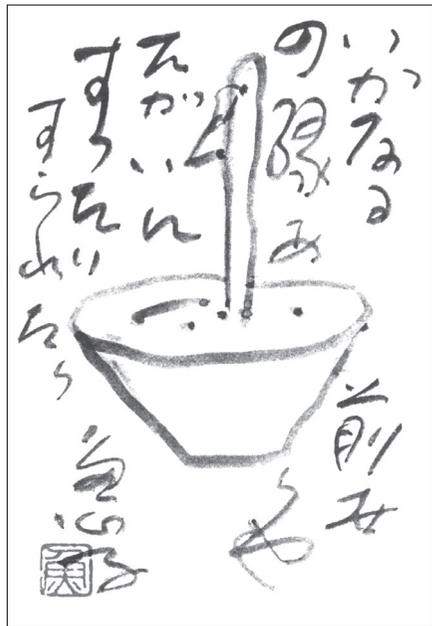
図三 八一 (M41・7/25)



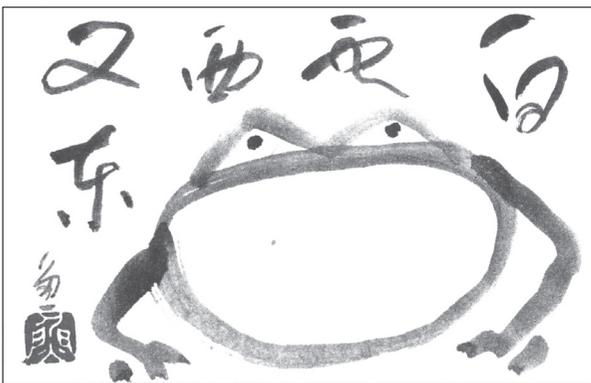
図二 八一宛名書き (S15・4/25)



図四 八一 (S13・1/21)



図五 魚心子 (S45・2/9)



図六 魚心子 (S39・9/11)